

への複合的な過程の総体として公教育を位置づけ、その複合性に実践的なかわりの契機がある、という方法論は、可能性に富んだ、重要な問題提起であると考えられる。

法律や勅令が山のように引証され、若干読みづらいところがあった。また、第1部、第2部の間に、若干の理論的振れが見られるとも感じた。しかし、教育史研究、公教育論研究にとどまらず、実践的視座の方法論的源泉としても、

重厚な問題提起が行われていると感じた。

広く読まれ、話題とされることを期待したい。なお巻末には、詳細な「教員処分法制及び関連事項年表(学制期—国民学校令期)、および「教員処分に関する文部省と地方学務当局等との間の往復文書一覧—教員処分体制の確立期(1890年—1900年)—」が収録されている。

(尾崎ムゲン)

堀 正嗣 編著

障害者問題ゼミナール 2 —癒しの関係を求めて—

(明石書店・2000年10月25日発行 1,900円)

本書は1997年6月に出版された『障害者問題ゼミナール—共に生きよう楽に生きよう』(明石書店、以下、前著と呼ぶ)の続編である。いずれも(社)子ども情報研究センターの「障害児の生活と共有を考える部会」が主催した「障害者問題ゼミナール」の講演記録をもとに講師が加筆修正した原稿、ゼミナール参加者からの感想、さらに編著者が「ゼミに参加するなかで感じ、そしてその後も考え続けてきた」(4頁)ことについて書き下ろした原稿で構成されている。

前著は障害者運動の第一線で活躍中の種々の障害を生きる当事者がゼミの講師である。しかし本書では、障害者のみならず「ハンセン病やHIVの差別に取り組んでいる人、同性愛というセクシュアリティをもった人、障害をもつ子どもの親、障害者問題に取り組んできた心理学者」等、障害者と同じ「社会からの排除と隔離」(227頁)という差別をうけてきた人を中心に多様な講師が登場する(山口ヒロミ、神美知宏、屋鋪恭一、平野広朗、山下栄一、藤岡幸子一章

立て順、敬称略)。

従って多様な立場から語られた原稿の一つひとつに触れることは、限られた紙幅の中では非常に難しい。そこでここでは、前著、本書を通じてみてとれる障害者問題に対する編著者の視点について述べることにする。

まず、障害者問題と深く出会うことによって生きやすくなるという視点である。障害を生きる生きにくさからの解放を、制度やシステムにおける差別的状況の変革に求める障害者たちが、社会変革を迫るときに依拠する「お互いの『弱さ』をも認め合い、支えあう関係を生きる」(前著260頁)という価値観は、障害者のみならず、すべての人を生きやすくするという視点である。

次に、サバイバーとしての障害者と共に生きること、存在の根底から自分自身を肯定できる場所にたつことができる(236頁)という視点である。存在そのものが否定されるようなこの世界で障害者が生きるということは、そのこと自体が人間の尊厳回復にむけての闘いで

ある。だから障害者はサバイバーであり、サバイバーとしての障害者は「人間は、ただ存在するだけで十分に価値がある大切な存在」(236頁)であることに気づかせてくれる。だから「闘いこそが根源的な意味で癒しの意味」(227頁)をもつことになるという視点である。

障害者問題に対する編著者のこれらの視点が明らかになると、ゼミ講師として障害者以外の人が招聘された理由も理解できる。またこれらの視点は、健常者中心の社会の価値観を撃つ力となり得るであろう。

ところで本著では、この「癒し」という言葉が慎重に取り扱われている。専門家による上下関係の中で与えられるヒーリング・ブームのそれとは違い、「差別、抑圧からの人間の解放であり、社会変革をもとめる実践である」(237頁)とされる。社会変革をもとめる実践が「癒し」であるのは、その闘いが、「暴力や権力による闘いではなく、愛による闘い」であり、「お互いのありのままを認めあい、愛しあい、支えあえる関係を築いていく闘い」(238頁)であるからだという。

しかし、この「癒し」という言葉は、本著の中ではもう一つの使い方がされている。「障害者運動と出会い、このゼミと出会うなかで、癒しにつながる体験を持ってきました」(4頁)というときの「癒し」である。上に述べたように闘いとしての「癒し」についてはその意味が厳密に定義づけられているが、この「癒し」については全く定義づけがされていない。だが、サバイバーたちの闘いを「癒し」とよぶときのそれと、サバイバーと共に生きることを通じて気づき得る側の「癒し」とは明らかに違っている。後者の「癒し」はむしろ上下関係が逆転したヒーリング・ブームに近いカタルシス的な「癒し」ではないだろうか。

ところで、社会変革をもとめる実践を「癒し」という言葉で表現したことからも伺えるように、

ここでは社会変革にとって何よりもまず重要なことは、人間関係の変革であるとされる。一人ひとりが、差別や偏見を生み出すとらわれた意識から解放されることによって、多様な価値観を認め合える人間関係に根ざした社会が実現するというのだ。だから、そこでは何よりも差別される側の当事者自身が、傷つけられてきたことにより「この世界に対する信頼と自分自身に対する信頼を破壊されてきた」(225頁)ことから解き放たれることが求められている。

ここに一貫して流れているのは、自己意識との関係をも含めて、人間関係の変革なくしては社会変革が達成されないという論旨である。だが、本著では人間関係の変革が社会変革にどうつながっていくのか、そのプロセスについては論及されていない。人間関係をはるかに超えたところで機能してしまっている巨大な社会構造があり、その変革を、いったい人間関係の変革のみで語りきれぬのだろうか。また、社会変革を通してしか変革されない人間関係もあるのではないか。

私たちの生きる場は、共に生きようとすれば楽に生きられず、楽に生きようとすれば共に生きられないような現実を合わせもっている。

「愛し合い、支えあって」生きたいと願い、深くかかわるからこそ深く傷つけあうことがある。それでも現実から目をそらさず、人とかかわりあっていきたいと願い、人とかかわることでしか生きられないからこそ、その生をどう生きるかで悩み苦しむ。そのような混沌としたどうしようもない人間の生の営みがあるからこそ、そこに社会変革の力が紡ぎ出されてくるのではないか。それとも「癒し」の関係によって描き出される世界からみれば、このような生々しい現実の生の姿はむしろ“誤った姿”なのであろうか。

とはいえ私自身、このゼミの参加者であり多くの参加者同様、そこで安心できる関係を経験

したことは事実である。それゆえ、ゼミ講師によるそれぞれの立場から平易な語り口調で記された一言一句の重みがはかりしれないことは身をもって経験している。同じ立場に身をおかず

とも、そこに語られている内容が、現実の自分の生に響いてくる不思議な一冊であるといえよう。

(井上 寿美)